



第 150 号

二〇一七年三月一五日発行
発行者 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畝傍町一番地
編集者 水野敏典

松林苑と奈良時代の築地（下）

須藤好直

四 多賀城、秋田城、払田柵

多賀城 多賀城跡政庁第Ⅰ期²⁴⁾（神
亀元年（七二四）創建）天平宝字六
年（七六二）大改修²⁵⁾の築地は、基
底幅が九尺の東辺築地と基底幅が六
尺余の北辺築地²⁶⁾がある。南辺築地S
F202の造営年代は、築地に先行
する田屋場横穴墓群を検討した柳澤
和明氏の考察により「七五〇年頃よ
りも新しく、多賀城跡政庁第Ⅱ期の
開始年である天平宝字六年（七六二）
と同じかこれよりやや古いとみられ
る²⁷⁾」ことが確定した。

南門周辺の再調査²⁸⁾で南門東側で検
出された南辺築地SF202aに伴
う「寄柱礎石・据穴」と「柱穴」は、
築地の北側では両遺構と重複する部
分が小さく、南側では重なる部分が
大きい。そのため、壁体築成後に須
柱が立てられたことになる。南門の

西側²⁹⁾では、南辺築地SF202aに
一九尺余を一単位とする積手の違い
が四区画確認されている。秋田城

秋田城跡では、天平五年（七三三）
造営の秋田出羽柵に伴う瓦葺の築地
（秋田城外郭Ⅰ期³⁰⁾が、天平宝字四年
（七六〇）に秋田城に伴う瓦を葺か
ない築地に改修され（Ⅱ期）ている。
外郭西部築地³¹⁾と東門付近で検出され
た築地は基底幅七尺、残存高一・五
mを測り、外郭西部築地では須柱跡
（「寄柱」跡）の検出が報告された
ことがある。しかし、この「寄柱」
跡を、伊藤武士氏は仮柱柱穴（添
柱）³²⁾と考えられた。

外郭南東隅で検出された築地は、
基底幅七尺余、残存高〇・八mを測
る。積み手の違いは明確ではなく、
須柱跡も検出されず、築地基底部の
両側に仮柱柱穴が検出されている。

次
松林苑と奈良時代の築地（下）
平成二八年度韓国研修報告
海外交流
附属博物館展示案内

須藤好直 1
中野咲 3
編集部 7
編集部 8

払田柵 払田柵跡創建期（九世紀
初頭）の外郭築地は板葺きである。³³⁾
外郭北東部築地と西部築地は、地震
による倒壊跡や仮柱柱穴、積手の違
い（約一八尺ないし二〇尺の作業単
位）などが検出されている。北東部
築地は基底幅が一〇尺で残存高一・
一五m、西部築地は基底幅が一〇尺
余で残存高〇・七mを測る。築地倒
壊跡の観察から築地の高さは一丈一
尺以上と推測されている。

なお、秋田城跡と払田柵の築地に
おいても須柱は検出されていないの
で、多賀城の築地須柱は東北城柵に
おける特異な例といえる。

五 築地の築造者

和銅二年九月丁巳条には造宮将領
以上に下賜の記事があり、宮の造営
において一定の成果があったことが
窺え、和銅三年三月辛酉条に遷都の
記事がある。しかし、翌四年九月丙
子条は、「宮垣未だ成らず」と記す。
そして和銅七年（七二四）一〇月辛

巳条に、造宮省の史生六員増員の記
事があり、霊龜元年（七一五）の朝
賀の儀式は大極殿で執り行われてい
る。同年五月に造宮卿となった従四
位下多治比真人景守が翌霊龜二年八
月には遣唐押使に任命され、養老二
年（七一八）に唐から帰朝している
（第八次遣唐使）。これまでの平城
宮跡における発掘調査成果によれば、
多治比景守が遣唐押使に任命された
時点では、築地大垣は未完成であっ
た。

その原因は、築地築造という新技
術獲得の是非を是とした場合は労働
力不足や技術の未熟さに拠ることに
なる。いっぽう非とした場合は、以
下のような想定ができる。

つまり遣唐押使多治比景守は、帰朝
後の養老四年（七二〇）に持節征夷
將軍、遣唐副使藤原馬養が神龜元年
（七二四）に持節大將軍にそれぞれ
任命されており、両名もしくは藤原
馬養は、大野東人が築いたと伝える
多賀城の造営³⁴⁾に関与した蓋然性が高

い。また後年、留学生吉備真備は天平勝宝八歳(七五六)に太宰大貳として怡土城を築いている。以上から、第八次遣唐使の使命の一つに大垣の完成や平城宮造営に必要な土木技術の獲得があったのではないかと推察される。従前の寺院の基壇や終末期古墳の墳丘版築に仮枿工法の痕跡を見いだすのは難しい。平城宮築地大垣で初めて仮枿工法が採用されたすると、大垣の基壇造営までを従来の版築によって造営し、築地本体にまで作業が及んでいなかった段階を考えることもできる。

つぎに、築地築造者が『続日本紀』に登場する例は以下の通りである。天平一四年(七四二)八月丁丑条に恭仁宮の「大宮垣」築造において、

造宮録正八位下秦下嶋麻呂の功績が特記されている。また、「垣」築造とは記されていないが、長岡宮造営の功業者が昇進の詔が発せられた延暦三年(七八四)二月己巳の半月後には、外正八位下秦忌寸足長に「宮城」築造の功により従五位下が授けられている(同月乙酉条)。さらにまた、長岡宮太政官院の「垣」築造においては、翌延暦四年八月乙酉条に従七位上太秦公忌寸宅守の功績が特記されている。その内容は、前二

者と同様に位階特進記事であり、宮大垣築造の功績が特記されている。大石良材氏は、これらの記事を秦氏の「都城経宮の際の財政的寄与が、

実際には宮城の宮垣や院垣の築造という形をとっておこなわれた」と位置づけ、秦氏が早くから宮垣築造に関与していた可能性に言及された。この指摘は、秦氏の縁戚関係の上からも興味深い。『続日本紀』は、平城宮の大垣築造に関して個人の功績を記していない。この問題に対する回答は準備はできていないが、秦氏の功績が特記された理由の一つには、築造方法が画期的であったのではないのだろうか。

六 おわりに

松林苑の築地には、平城宮築地大垣と同様に、長岡宮で見られたような須柱や短い作業単位は認められない。また、松林苑の外郭西面築地が地形に即して築かれている点は、多賀城や払田柵、秋田城などの各外郭施設と同様である。さらに奈良時代前半の築地が、我が国における初期の築地であることを追認できた。

そして築地築造という新技術の獲得が第七次遣唐使ではなく、本格的に築地が築造される時期に対応する

養老二年帰朝の第八次遣唐使に拠るのではないかと推測するに至った。

註

(24) 多賀城跡は宮城県多賀城跡調査研究所によって昭和四四年(一九六九)から継続的に発掘調査が実施されている。多賀城跡政庁第一期(神龜元年(七二四)〜天平宝字六年(七六二))、第二期(天平宝字六年〜宝龜二年(七八〇))、以降四期の変遷が考えられている。

(25) 古川一明「Ⅱ. 第八二次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報2010多賀城跡』二〇一二年三月、四一〜七四二〜四九頁。

(26) 古川一明「Ⅲ. 第七五次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報2003多賀城跡』二〇〇四年三月、二七〜三一・三六〜四一頁。

(27) 柳澤和明「多賀城市田屋場横穴墓群の再検討」『東北歴史博物館紀要』一一、二〇一〇年三月、四〇頁。

(28) 三好秀樹「Ⅱ. 第八七次調査2. 田屋場地区(南門地区)の成果」『宮城県多賀城跡調査研究所年報2014多賀城跡』二〇一五年三月、七〜三九頁。

(29) 後藤秀一「Ⅱ. 第七二次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報2001多賀城跡』二〇〇二年三月、四一〜五三二〜三五頁。

(30) 秋田城跡は秋田市秋田城跡調査事務所によって昭和四七年(一九七二)から継続的に発掘調査が実施されており、秋田城外郭I期(天平五年(七三三)〜天平宝字四年(七六〇))、II期(天平宝字四年〜八世紀末・九世紀初頭)以降五期の変遷が明らかにされている(伊藤武士『日本の遺跡12 秋田城跡』同成社、二〇〇六年七月、三四・三五頁)。

(31) 小松正夫・日野久「Ⅲ第五次発掘調査」『秋田城跡 昭和六三年度秋田城跡発掘調査概報』一九八八年三月、一八〜三三頁。

(32) 小松正夫・日野久・西谷隆「Ⅱ第五次発掘調査」『秋田城跡 平成元年度秋田城跡発掘調査概報』一九八九年三月、四三〜六五頁。

(33) 伊藤武士の同じ遺構の構造説明には、須柱(寄柱)の記述がない(前掲註(30)文献、三五頁)。一九八九年から二〇〇五年までの間に遺構解釈が変更されている。

(34) 安田忠市・伊藤武士・松下秀博・筒井孝志「Ⅱ第八三次発掘調査」『秋田城跡(秋田城跡調査事務所年報2004)』二〇〇五年三月、七〜一〇・一六・一七・八六〜九〇頁。

(35) 払田柵跡は秋田県払田柵跡調査事務所によって昭和四九年(一九七四)から継続的に発掘調査が実施されている(児玉準『払田柵跡』Ⅱ、秋田県教

育庁弘田柵跡調査事務所、一九九九年三月、二一八～二二六頁)。
 (36) 前掲註(35) 文獻1、一一四～一二二頁。
 (37) 『多賀城碑文』

(38) 七世紀前半の吉備池廃寺塔基壇は版築(築成)土が山形(箱崎和久・橋本輝彦「第三章2遺構各節」頁三九・四一『吉備池廃寺発掘調査報告』奈良文化財研究所、二〇〇二年三月、四六～四九頁)を、七世紀後半の鳥谷口古墳の墳丘封土も版築土が山形(佐々木好直ほか『鳥谷口古墳』奈良県立橿原考古学研究所、一九九四年三月、一三頁)を呈する。七世紀末八世紀初頭頃の石のカラト古墳の版築土も山形(金子裕之「Ⅱ石のカラト古墳(第7号地点の調査)第6・7・13図」『平城山Ⅲ』奈良県教育委員会、一九七九年五月、八・九・一三頁)を呈するが、特に墳丘外側の法面近くの断面が三角形を呈する。両古墳ともに板枿を用いずに築成されたと推測できる。
 (39) 大石良材「秦氏の宮城垣築造」『古代文化』第九卷第六号、一九六二年二月、一六三・六四頁。

平成二八年度韓国研修報告

中野 咲

はじめに

橿原考古学研究所では、平成一六

年度から韓国国立文化財研究所との交換研修事業を行ってきた。今年度

(40) 秦氏の縁戚関係を見ると、第七次遣唐使留学僧弁正の子、第九次遣唐使判官秦朝元之女と藤原馬養の子清成との間に藤原種継が生まれている。また、造宮大輔秦下嶋麻呂之女と長岡京・平安京造宮の使者藤原小黒麻呂との間に藤原葛野麿が生まれている(佐伯有清『新撰姓氏録の研究 考證篇 第四』吉川弘文館、一九八二年一月、三四八・三六四～三六六頁。阪本太郎・平野邦雄監修『日本古代氏族人名辞典』吉川弘文館、一九九〇年十一月)

(41) 一間ないし二間を作業単位とした築地は、長岡宮跡以外においては多賀城南辺築地と弘田柵に見られる。天平宝字六年(七六二)と同じかこれよりやや古い多賀城南辺築地、長岡宮内裏南方官衙地区南北築地、九世紀初頭の弘田柵外郭築地などは何れも天平一四年(七四二)の恭仁宮大垣より後出の資料である。
 (42) この想定は、平城遷都当初から平城宮築地大垣乃至第一次大極殿院築地回廊の築地が板枿工法で築造されていたことが確定した時点で、雲散霧消する。

から諸事情により研修期間が短縮されたが効果的な研修のために「三国時代の手工業生産における日韓技術交流の研究」という共通の研究課題が設けられた。
 韓国での滞在期間は平成二八年一〇月三日～一二月九日までの延べ六八日間である。

二 出国まで

研修期間の短縮と共通課題の設定により、昨年度以上に事前の準備が必要となった。来年度以降の派遣職員のために、準備についてやや詳しく書いておく。

内示を受けたのは二ヶ月半前の平成二八年七月半ばであった。研究期間と共通研究課題のほか、語学研修は実施しないことが申し伝えられた。そのため、まず行ったのは韓国語の学習と資料調査の計画である。

語学のリーディングについては、学生時代から論文の輪読会に参加した経験などがあったため、多少はハングルを読むことができた。会話については、訪韓の機会や、当研究所へ来られた韓国の研修生の方と会話する機会があったのだが、相手の日本語が上手で、つい日本語で話してしまい、上達することはなかった。そ

こで、出国までの二ヶ月半は、できるだけ会話の勉強を心懸けた。教材は、聞き流し教材と、韓国ドラマ、そしてラジオ講座であった。この頃、テレビはリオオリンピック一色であったが、これを見ずに韓国ドラマを観て、語学CDを聞いて過ごした。

資料調査については、日本で可能な限り調査計画を練り、リストを作成した。報告書は、近年、日本でも『全国遺跡報告総覧』として、報告書の電子化とホームページでの公開が進められているが、文献の電子化については韓国の方が進んでいると感じた。しかし、古い報告書には電子化されていないものがあつたり、一部機関では公開していなかったり、公開していても海外からのアクセス制限があるなど制約も多かった。そこで、入手が困難な報告書は、韓国の知人に頼んで送付してもらつたりもした。また、韓国では最近の出土遺物は基本的に報告書刊行後二程度で調査機関から地元の国立博物館に移管される。しかし、移管が一部であつたり、移管先が地元市立博物館の場合もあり、調査申請前に必ず所在確認が必要である。ただ、国立博物館や調査機関に直接問い合わせるには、語学力に無理があつたので、

これも韓国の知人や当研究所の韓国派遣経験者を通じて依頼し、半分程度を確保できた。

最後にもう一つ、準備に当たって考慮したことがある。男性にはピンとこないかも知れないが、服装と化粧の問題である。服装や化粧は韓国の女性の流行をほどよく取り入れ、韓国になじむことを心がけた。日本と韓国では流行している服装や化粧が多少異なっていたので、当時日本で流行していたロングスカートは置いて行き、韓国で流行していた真っ赤な口紅を購入した。

三 出国

出国までの手続きは遅延なく進み、予定通り一〇月三日に出発することができた。当日は文化財研究所からウ・ミラさんが仁川空港まで出迎えるに来てくださった。この時初めて、この日は韓国の開天節という国民の祝日であり、文化財研究所職員は休みであること、担当の黄慶順氏は次の日も休暇をとっていること、研究所に出勤するのは二日後であること知らされた。驚きながらも、ウ・ミラさんとバスで大田のゲストハウスまで向かい、生活についての簡単な説明を受けた。初日から波乱の展

開であったが、次の日は先輩研修員からの助言を受けて、大田市内にある忠南大学校と韓南大学校博物館を見学した。

研究所へ出勤したのは三日目の朝であり、まずは崔孟植所長にご挨拶をした。私の席は、昨年度までの考古研究室ではなく、本館二階の情報室という檀考研の資料課に似たサーバーと、それを管理する職員が常駐する部屋であった。このときに、今年度から文化財研究所の研修生受け入れ体制が変わり、全面的に研究企画課の管轄となったこと、また、研修員の対応を専門とする職員として一〇月から研究員（当研究所の嘱託に相当）の崔智燕氏（民俗専門）が通訳として配属されたことを告げられた。考古研究室へ挨拶に行ったのは、四日目であった。李相俊考古室長、黄仁鎬研究員、当研究所で研修経験のある金東勲氏、金惠貞氏、鄭修鉦氏にご挨拶をした。

四 生活と語学

宿舎は昨年度と同様に大田広域市のゲストハウスであった。官民の研究施設の多い大田市が国内外の研究者的ために開設した宿泊施設であり、利用客は韓国人のほか、アジアや欧

米の方も多数いた。ゲストハウスは川沿いに立地し、私の部屋は八階であったため、眺めは非常に良かった。また最上階の十四階には喫茶店があり、休日の朝食はここでとることが多かった。この喫茶店では英語が公用語で、欧米からの客も多く、韓国にいることを忘れた。

ゲストハウスの部屋にはテレビ、冷蔵庫、コンロなど生活用品が一通りそろっており、最上階にはコイン式の洗濯機と乾燥機もあった。週に一回清掃も入り、快適に生活することができた。また、Wi-Fiのルーターも貸し出され、ネット環境も良好であった。ゲストハウスは市街地から少し離れた場所にあったが、最近ロッテシティーホテルがオープンしたほか、イベント会場などもあり、来客をターゲットにしたコンビニや雑貨店、食堂やカフェなどが新たに开店していたので、日常的な買い物や食事などには困らなかつた。

宿舎から文化財研究所までは少し距離があり、自転車でも二〇分、バスで二本乗り継ぐか、最寄りのバス停から一五分歩くかを時によって選択した。また、タクシード日本より安いので、時々利用した。

研究所へ通勤に使う自転車の手配

や携帯電話の契約などは、崔氏のお世話になった。彼女のおかげで研修開始後一週間以内に手続きを済ませていただき、快適に生活を始めることができた。

語学については、聞き流し教材に登場するフレーズが日常的に耳に入った。また、覚えたフレーズは比較的通じたので、言葉が全く通じず困ったという経験はなかつた。もちろん、通常のスピードでの会話や、専門的な展示解説や調査現場の説明は全く理解できなかつたが、片言ながらタクシートの運転手や食堂の店員との雑談、同年代の職員と食事をしながらの会話ができて、伝わる楽しさを実感した。余談になるが、前述のように、服装や化粧で韓国になじむよう心がけた結果、逆に道を聞かれ



写真1 ゲストハウスからの眺め

ることもしばしばあった。

帰国直前の一二月は、韓国の年度末にあたり、通訳の崔氏は多忙となり、帰国の手続きや各所への挨拶は、すべて筆者の韓国語で行ったが、大きな問題なく済んだ。帰国の挨拶も何とか謝意を伝えることができたと思う。このように、ある程度、意思の疎通はできたが、これに慢心し、研修中は、それ以上語学を勉強しなかったため、上達はしなかった。帰国後の継続的な勉強の重要性を先輩研修員に説かれており、今後も勉強は続けようと思っている。

土日の休暇のどちらか一日は研究会に参加することが多かった。もう一日は、宿舎での休息や、ホームページから報告書や論文のダウンロードをして過ごした。また、宿舎の周辺には落ち着いた雰囲気のコヒーショップも多かったためそこで本を読むこともあった。

韓国での生活は、鉄道が日本ほど整備されておらず、長距離バスが中心である点や、車の運転が荒い点など日本の感覚からするとやや不慣れな点もあったが、それ以外は大きな違いはなく、ネット環境はWi-Fiが使える所が多く、日本より良好であった。クレジットカードの利用が社会に浸

透しており、日本よりも便利と感じるところも多くあった。また、町中で話しかけられたり、道を聞いても親切に教えて下さったりと、人々との距離が近いと感じた。

五 研究について

共通テーマに基づき、日韓の土器製作の比較研究を研究課題とした。この時期の日本列島の土器は韓半島南部の各地土器の影響を大きく受けており、韓半島南部各地の土器の特徴を把握することを第一の目的とした。また、昨年度まで科学研究費を受けて、日韓の羽釜と移動式カマドの考察を行っていたが、韓半島の類例は、遺漏や未見の資料も多かったため、その補足調査を第二の目的とした。

調査を計画するにあたって、最初の一週間で所在確認や調査希望資料のリストを完成させた。国立・公立博物館へは、文化財研究所から調査の申請をしてもらい、通訳の崔氏に調査同行していただいた。国立公州博物館や漢城百済博物館では百済土器を、東亜大学校博物館では伽耶土器を、国立金海博物館や晋州博物館、昌原大学校博物館、三江文化財研究院では羽釜や移動式カマドを調査し

た。

国立文化財研究所では風納土城の出土土器を見ることができ、これは、同研究所鄭修鉦氏・慎イスル氏に相談に乗っていただいた。

国立中原文化財研究所では一昨年度の当研究所の交換研修員であった韓志仙氏のご尽力で忠州大坪里遺跡の土器も実見できた。この調査には、柳本照男氏（NPO法人国際文化財研究センター）も参加されていた。お二人には近隣の中原高句麗碑にもご案内いただき、日本に比べて豊富な金石文を用いた韓国考古学の醍醐味を知った。さらに韓氏には、二日間にわたり、全羅道地域の遺跡・博物館を案内していただいた。

国立扶余文化財研究所では、王宮里遺跡から出土した移動式カマド、同伽耶文化財研究所では同地域の古墳出土土器を実見できた。これには平成二五年度に当研究所の交換研修員である田庸昊氏（国立扶余文化財研究所）や昨年度の交換研修員の鄭仁部氏・李知姫氏（国立伽耶文化財研究所）のご尽力があり、さらに田氏には扶余・益山地域の遺跡、鄭氏には金海地域の遺跡も案内していただいた。

また、崔孟植所長から瓦と土器の

比較を勧めていただき、国立慶州文化財研究所で、四天王寺出土の代表的な瓦当を観察する機会を頂いた。さらに同研究所梁滄鎰氏には市内の遺跡を案内していただいた。ここでは奈良文化財研究所から派遣されていた芝康次郎氏にもご挨拶ができた。

嶺南地域では、趙晟元氏（釜慶大 学校博物館）に釜山大学校博物館、釜山市立博物館所蔵の羽釜・移動式カマド調査に同行して頂き、河承哲氏（慶南発展文化財研究院）には同研究院所蔵の鳳凰洞遺跡出土土器調査の便宜を図っていただいた。



写真2

国立慶州文化財研究所での四天王寺出土瓦の調査

いた。また、李英澈院長（大韓文化財研究院）には同研究院所蔵高敞峰山里黄山遺跡出土土器の調査をお許しいただき、これには同研究院林智娜氏に対応いただいた。さらに、日本から忠南大学に留学中の野田優人氏（京都府立大学）には全北大学校博物館、呉昇桓氏（円光大学）には、全北文化財研究院の調査に同行いただいた。また円光大学では崔完奎先生や呉氏のご配慮により同大で実施された土器を用いた調理実験についてご教示いただいた。

嶺南大学では、鄭仁盛先生のご配慮により林堂遺跡出土土器を調査することができた。

慶北大学では、朴天秀先生に伽耶土器の地域色について、土器を手になしながらご教示いただいた。

このように、各地域の土器研究者に調査に同行いただき、情報・意見交換を行い、親交を深めることができたことは大変有益であった。

研修期間の一〇月～一二月は、研究会が多く開催される時期であった。権五榮先生（ソウル大学）や金武重先生（中央文化財研究院）には、研究会の情報だけでなく、会場でも多くの研究者を紹介いただくなど、大変お世話になった。中でも韓国考

古学会では、武末純一先生（福岡大学）を代表とする「日韓集落研究会」が参加したセツシヨン「韓日の古墳」があり、当研究所附属博物館の坂靖学芸課長などの日本人研究者も研究発表をしていた。武末先生と金武重先生のご厚意により学会中はセツシヨンのメンバーに同行させていただき、両国の多くの研究者にご挨拶することができた。さらに、釜山市立福泉博物館では「日本の古代文化への招待」と題した日本考古展と関連シンポジウムが開催され、日本からは久住猛雄氏（福岡市教育委員会）、当研究所青柳泰介係長が発表を行っていた。ここでも発表者一行に同行させていただき、洪漣植館長に大変お世話になった。

この他、長期研修を利用して「勒島遺跡と原の辻」（国立晋州博物館）、「漢城百濟」（伽耶王陵博物館）など多くの特別展示見学する機会を得た。

重要遺跡の現地説明会の開催も多かった。ソウル夢村土城では三時期にわたる古代の道路が検出され、同石村洞古墳群では周知の積石塚の間から複数の積石塚が重複した状態で検出された。また、和順千德里懷徳古墳群三号墳では九州系石室に類似

した横穴式石室が、扶余陵山里古墳群では横穴式石室が、チョクセム古墳群では積石木槨墓が調査され、いずれも見学することができた。

公州大学校金奎虎先生のご配慮により、学生向けに「調理方法の変化からみた渡来系文化の受容過程」と題した発表を行い、貴重なご意見をいただいた。

六 おわりに

今回の研修は二ヶ月弱という短い期間にもかかわらず、多くの調査や遺跡・博物館の展示の見学をすることができ、濃密な時間を過ごすことができた。今回の研修で得た多くの経験や人脈は今後の調査・研究業務に生かしていきたい。

最後となったが、研修中は韓国国立文化財研究所研究企画課をはじめとする文化財研究所の方々や、当研究所企画課の方々にお世話になった。また、お名前を挙げられなかった方たちも含めて様々なご支援を受けた。これは韓国の方々が親切であることとは言うまでもないが、これまでに築かれてきた日韓の良好な交流のおかげであることを痛感した。両国の方々に感謝申し上げる。また、滞在中の研究活動には、公益財団法人由

良大和古代文化研究協会の助成を受けており、感謝を申し上げます。



写真3 円光大学炊飯実験場にて呉昇桓先生と



写真4 慶北大学で朴天秀先生から伽耶土器の指導を受ける

海外交流

国際シンポジウム

「ユーラシアからの まなざし」

平成二十九年一月二日～一七日まで、中国西北大学文化遺産学院より陳洪海院長、王建新教授、冉万里教授が来日し、榎原考古学研究所で研修中の寧夏文物考古研究所馬曉玲副研究員と慶應義塾大学言語文化研究所青木健先生、菅谷文則所長を加えて国際シンポジウムおよび関連する研究会を開催した。これは文化庁補助事業の『地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業』の一部である。

開催趣旨

ユーラシア大陸の東端に連なる列島で構成された日本は、古来より大陸の文化を受け入れながらも、海を隔てた環境特性から、独自の文化を生み出してきた。ことに奈良が日本の政治的・文化的中心であった古墳時代から奈良時代には、朝鮮半島、中国といった隣国のみならず、ひろくユーラシアの諸地域との積極的な国際交流が盛んに行われ、伝えられ

た文化・文物は日本の文化・文物と融合し、その後の日本文化の形成に大きな影響を与えることになった。今回のシンポジウムは、そうした歴史の背景である汎ユーラシア規模での文化交流の形成・発展について、広い視野から検討し、日本文化の基底にある国際文化交流の足跡を多くの方々に知っていただくことを目的とした。

日程

一月二日(木)

中国西北大学先生方来日

一月一三日(金)

臨時研究会を榎原考古学研究所会議室にて開催した。榎原考古学研



写真1 一三日榎考研会議室での研究会

究所の常勤、非常勤研究員を交えて、各発表の論点の整理を行った。通訳に薩日娜氏、黄盼氏が加わった。

一月一四日(土)

奈良県社会福祉総合センター大ホールにおいて一〇時～一七時まで国際シンポジウムを開催した。

「シルクロード上の甘肅青海地区
先史時代の墓葬」
陳洪海
(西北大学教授)

「東天山から西天山―古代月氏文
化の考古学的探索」
王建新
(西北大学教授)

「シルクロード上の仏教寺院遺跡
―スバシ仏教遺跡を中心に―」
冉万里
(西北大学教授)

「寧夏のソグド人―固原南郊隋唐
期の史氏家族墓」
馬曉玲
(寧夏文物考古研究所副研究員)

「東アジアのソグド人」
菅谷文則
(奈良県立榎原考古学研究所
所長)

「ユーラシアのゾロアスター教」
青木健
(慶應義塾大学言語文化研究所員)

討論



写真2 一四日 国際シンポジウム会場



写真3 一四日 シンポジウムの様子

一月十五日(日)
 研究所講堂において、研究所常勤・非常勤職員に一般参加者を加えて、一〇時～一七時半まで、一四日の発表内容をもとに、総合討議を行った。午前はシルクロードの形成に係る文化交流、午後は、シルクロードと仏教・ゾロアスター教に主題をおいて、質疑応答を中心に行った。



写真4 一五日 研究所講堂での総合討議風景
 一月一六日(月)

「ユーラシアからのまなざし」の関連調査を和歌山県高野山において行った。当日は雪が積もっていたが、高野山金剛峯寺の奥院、根本大堂等を巡り、高野町教育委員会会議室に



写真5 奥院での集合写真

て、意見交換会を行った。参加メンバーは青木先生を除くシンポジウムの講師に、和歌山県教育委員会文化遺産課主幹黒石哲夫氏、(公財)和歌山県文化財センター主査藤井幸司氏、和歌山県高野町教育委員会社会教育係長田中宏人氏、主査木本誠二氏が加わり、「唐文化の日本の受容(高野山を事例に)」と世界遺産としての保存管理」を主題として意見交換を行った。

なお、通訳として黄盼氏が、事務局として豊岡卓之企画部長、橋本裕

行企画課長以下、水野敏典、鈴木裕明が同行した。

一月一七日(火)
 中国西北大学先生方帰国



写真6 高野山 根本大堂視察風景



写真7 高野町教育委員会での意見交換

附属博物館 展示案内

春季特別展

「新作発見！弥生絵画
 —人・動物・風景—」

▼会期 四月二三日(土)

～六月一八日(日)

▼研究講座

第一回 四月三〇日(日)

「新作発見！弥生絵画」

当博物館主任学芸員 北井利幸

「戈・盾をもった人物を読み解く」

龍谷大学名誉教授 岡崎晋明

第二回 五月二日(日)

「唐古・鍵遺跡出土の絵画土器」

田原本町教育委員会

文化財保存課課長 藤田三郎

「飛翔する鳥—福岡県筑前町大木

遺跡九二号甕棺—」

福岡大学教授 武末純一

第三回 六月一日(日)

「東アジア社会における弥生絵画

の位置づけ」

当研究所企画課長 橋本裕行

「描かれた動物—シカ・ヒツジ・

サカナ—」

天理大学客員教授 深澤芳樹